

第18回西アジア発掘調査報告会報告集  
Proceedings of the 18th Annual Meeting of Excavations in West Asia

---

〈西アジア歴史時代の調査〉

# 農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落 —シリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2010年度発掘調査—

## Excavations at Tell Ghanem al-Ali 2010, the Jabal Bishri, Syria

長谷川 敦章

HASEGAWA, Atsunori

日本学術振興会特別研究員

JSPS Research Fellow

飯塚 守人

IIZUKA, Morito

筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生

M. A. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

大沼 克彦

OHNUMA, Katsuhiko

国士舘大学イラク古代文化研究所教授

Professor, The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

### 1. はじめに

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ラッカ市近郊のバリーフ川がユーフラテス河に合流する地点から約50km東に位置する(図1)。当該遺跡を中心にビシュリ山地周辺において、「セム形部族社会の形成」をテーマにした総合的研究プロジェクトが、昨年度まで5年間行われた。このプロジェクトでは様々な調査・研究が行われたが、当該遺跡においては考古学分野の現地調査の一環として、6次に及ぶ発掘調査が行われた。本調査はこのプロジェクトの考古学分野を引き継いで行った発掘調査である。

昨年度までの調査においては、6つの発掘区を設け、基本層序の確認と住居址の構造について明らかにした。また遺跡の地表面はほぼ全面に確認できる住居址を測量し、その分布を調査した。これらの成果を踏まえると、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は紀元前3千年紀を中心に栄えた中規模集落であると考えられた。この集落は紀元前3千年紀末期に廃絶し、その後は土壌墓造

営などの小規模な利用のみにとどまり、再び集落が営まれることはなかった。

本年度は土壌墓の継続調査と新たに第7、8発掘区を設け発掘調査を行った。

### 2. 第7、8発掘区の概要

前年度までの調査において、遺跡の各所に調査区を設けて発掘を行った結果、遺跡北西部に位置する第3発掘区の遺構の遺存状況が最も良く、何度も張り直された石膏プラスターによる床面が検出され、動物形土製品が出土するなど、他の発掘区にはみられない要素が確認できた。そのため、遺



図1 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の位置

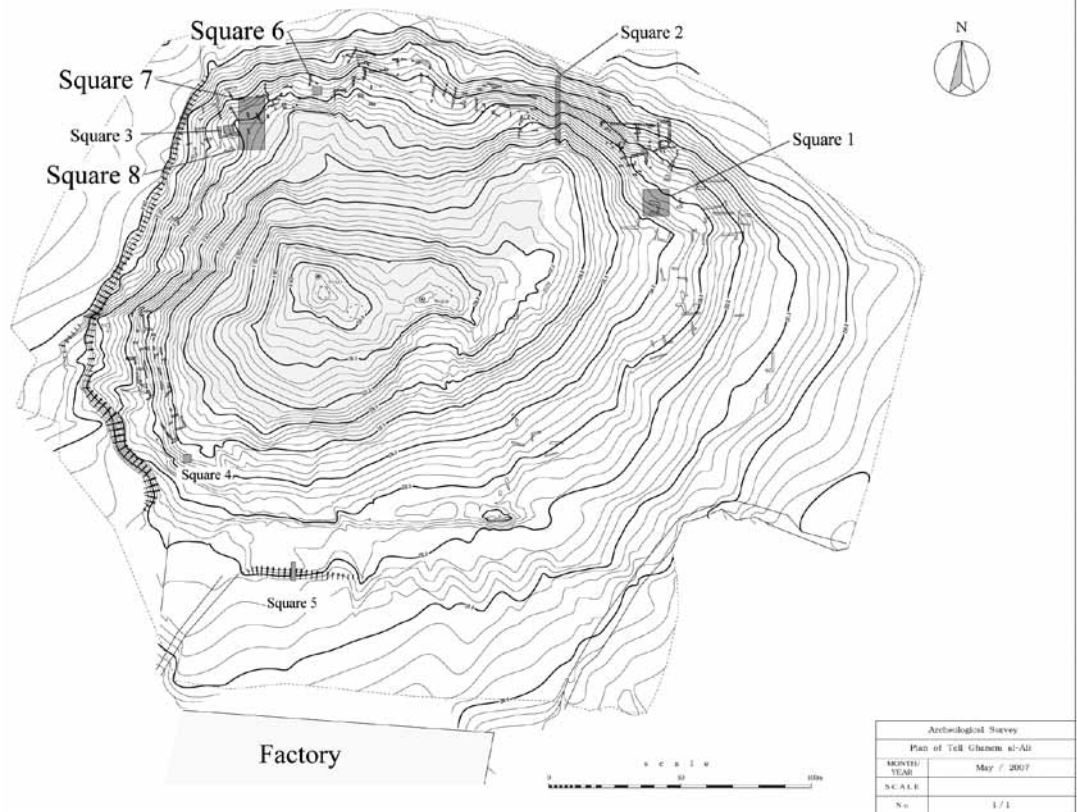


図 2 本年度の発掘区(第 6、7、8 発掘区)の位置

跡北西部は遺構の遺存状態が良く、同じ遺跡内でも異なる特徴を有する遺構が存在している可能性があると考えた。また、遺跡北西部ではテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の特徴である、円形焼成遺構群と複室構造の遺構が地表面に現れていた。

そこで、本年度の調査では、遺跡北西部に第 7、8 発掘区（それぞれ 10m×10m）を設けて発掘を行った（図 2）。両発掘区は南北軸に並べて配置し、間に幅 1m のベルトを設定した。調査の目的は、第 1 発掘区（10m×10m）で検出された住居址との比較及び一連の円形焼成遺構群の構造の解明である。調査期間は 10 月下旬から 11 月までの約 2 週間であった。

### （1）第 7 発掘区

第 7 発掘区では 2 つの建築層を確認した。第 1 建築層では、発掘区南端部分で北西方向に長軸をもつ長方形の建築遺構を検出した。この建築遺構の主要部分は第 8 発掘区で検出しており、当該発掘区では北側の一部を確認することができた。遺存状況は良くないが、壁の状況から複数の部屋を持つ住居であることが判明した。以上より当該遺構は、複室構造を持つと考えられるが、全体のプランは不明である。

第 7 発掘区では、合計 5 基の円形焼成遺構が検出されている。そのうち 4 基は密集しており、残りの 1 基は少し離れ、発掘区の東端に位置している。いずれも直径約 70cm の円形を呈しており、粘土による厚さ 6 cm



図3 円形焼成遺構群  
(第7発掘区 南東より)

程の壁を有する。その全てが基礎部分のみ遺存しており、壁の残存高は最大でも20cm程度である。炭化物と灰からなる覆土の下からは、明確な床面は検出できなかったが、こぶし大の礫が敷き詰められてあり、一部には石臼が再利用されていた。これらの特徴は、現代のシリアでタノールと呼ばれているパン焼き窯に類似している。集中して検出された4基の焼成遺構のうち、3基は住居の内側に隣接して配置されているのに対し、残りの1基は住居北壁の北側に、壁の内側に食い込むように構築されている(図3)。プランからは、焼成遺構が北壁を切っていると思われるが、壁との構造上の関係や構築順序等を明らかにするためには、より詳細な調査が必要である。

発掘区北半分では、第1建築層に属する建築遺構が検出されなかったが、第1建築層の基底面より低い地点で日干しレンガによる建築遺構を検出した。幅約40cmの壁によって区画された6部屋を持つ複室構造をもつ建築遺構である。日干しレンガの壁は基礎石列を有しているが、明確な床面は確認できなかったため、第2建築層についてはさらなる調査が必要である。



図4 第7、8発掘区全景 南東より

## (2) 第8発掘区

第8発掘区では、前述した第7発掘区第1建築層の建築遺構の大部分が検出されている。この住居の外壁は幅約80cmの石壁により構成されている。住居の規模は5m×9mで、日干しレンガの壁によって部屋が南北に分割されている。北側の部屋では北西付近、南側の部屋では南西付近に幅約1mの入口が確認された(図4)。

北側の部屋には炭化物を多く含む灰が円形に堆積しており、底部には40cm大の礫が敷き詰められている。この灰は第7発掘区で検出された円形焼成遺構群付近まで広がっており、それら焼成遺構から廃棄された灰の可能性もある。また日干しレンガの壁に接して、石膏槽を3つ検出した(図5)。いずれも80cm大の矩形をしており、深さは約10cmである(図6)。一種の水場遺構と考えられる。以上のことから、北側の部屋は何らかの工房であった可能性が高い。一方南側の部屋では、入口の内側両脇にそれぞれほぼ完形の甕が置かれていたことが確認できた。

## (3) まとめ

以上の成果は、第1発掘区の成果と比較するためには充分ではないが、現時点で指摘できることは、いずれも複室構造をもつ



図5 石膏槽と灰ピット  
(第8発掘区 北より)

遺構であるが、機能が異なっていた可能性がある点である。第7、8発掘区では、焼成遺構や石膏プラスターによる遺構が同一の部屋の中から複数検出されている。このことから工房等の特殊な機能を持った部屋であったと考えられるのである。このような建築遺構の特徴の差異は、居住者の生業の違いを反映しているのかもしれない。しかし、今後の調査において詳細を明らかにし、慎重に解釈をしていく必要がある。(長谷川敦章)

### 3. 第6発掘区

第6発掘区は過去2度(2009年5月、8月)にわたって発掘された。目的は、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡における青銅器時代集落の居住期間と集落内機能差を探求するためである。本年度は継続発掘をおこなったが、地山に到達させることなく、同発掘区の調査を実質的に終了した。

以下は最終的に確定した層序である。

第1層(表土)：発掘区の全体で北方向へ傾斜下降しながら薄くなっている。堆積は10cmから15cmである。

第2層(土壌墓)：中期青銅器時代I期終末期の年代(2009年8月のミッシェル・マクディシ氏の個人的教示による)の土壌



図6 石膏槽(第8発掘区 北より)

墓。この土壌墓は下位の第1建築層を部分的に切削して作られている。プランは円形ではなく不規則な楕円形を呈しており、一定規格に沿いながら組織的に作られたものとは考えにくい。

ピット：発掘区の北西隅部で検出されたこのピットの内部は全体的に灰青色を呈していて、灰と炭片から成っている。少量の土器片と小礫を含む。西側セクションはこのピットが第1建築層より後に掘られたことを示している。内部から出土した土器の特徴から前期青銅器時代Ⅲ/Ⅳa期の年代であると考えられる(土器の年代は長谷川敦章氏による：以下同様)。

第1建築層：この建築層は上述した土壌墓が作られた際に部分的に破壊されている。最も厚い部分で40cmほどしかない薄い層で、茶褐色もしくは黄色を帯びている。際立った硬化も、連続する灰もみられない。前期青銅器時代Ⅲ/Ⅳa期の土器片と、少量の原礫面付き剥片、チップという石器が出土している。この層を第1建築層と呼ぶ理由は、石と日干レンガを重ねて作った壁の一部が発掘区の南西隅部でこの層と直結して残存していることによる。床面は土壌墓の底部から10cmほど下にあり、石膏を塗られていて、非常に硬くなってい

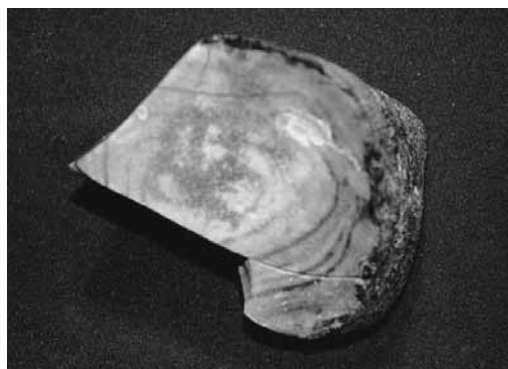


図7 第6発掘区出土石器（接合した2つの原皮礫面付き剥片）

る。そして、下位の建築層（第2建築層）の日干レンガ壁を削り、水平にすることで作られている。

第2建築層（2a）：第1建築層床面の下から、最厚部分が20cmほどの第2建築層（2a）を検出した。前期青銅器時代Ⅲ／Ⅳa期の土器片と少量の原皮付き剥片やチップが出土したが、原皮付き剥片のうち2つは接合する（図7）。床面は非常に硬く、薄身の石膏と連続する灰で覆われていた。壁には下位の建築層（2b）のものが継続して使われている。

第2建築層（2b）（図8）：第2建築層（2a）の下で、30cmから50cmの堆積の第2建築層（2b）を検出した。この層では少量の土器片と原皮付き剥片やチップが出土している。土器片は前期青銅器時代Ⅲ／Ⅳa期の年代で、石器は上層のものと同じ特徴を有している。灰茶褐色をした床面は非常に硬く、その直上から、小礫と水平状態で埋没した土器片が出土した。床面には石膏も灰もみられない。上位第2建築層（2a）の壁としても使用されている壁は、北西－南東/東北－西南の方向に走っている。したがって、北－南/東－西に走っている第1建築層の壁とは異なっている。



図8 第2建築層（2b）の床面と壁（第6発掘区 西より）

以上述べたように、第6発掘区での本年度の調査は、前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけての層の連なり状況を最終的に確認した。

過去4年にわたってテル・ガーネム・アル・アリ遺跡で推進してきた一連の発掘を通し、同遺跡が前期青銅器時代に最頂期を迎え、後の中期青銅器時代には居住の密度が低下して、土壙墓などだけの目的で使用されたという仮説を提示するにいたっている。この仮説は第6発掘区の調査によってより信憑性の高いものとなったようである。（大沼克彦）

#### 4. おわりに

今年度から調査方針を新たにし、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査を再開した。遺跡中央部分は広範囲が現代の墓地として利用されているため、調査が可能であるのは遺跡周縁の限られた部分のみである。そのため、遺跡の全貌を明らかにすることは困難であるが、昨年度までの成果を踏まえつつ、詳細な調査を行うことでテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落の実態に迫っていききたい。

2010年度テル・ガーネム・アル・アリ遺跡調査の参加者は以下の通りである。

日本側メンバー：大沼克彦（日本側調査団長・国士舘大学）、長谷川敦章（日本学術振興会）、飯塚守人（筑波大学大学院）。シリア側メンバー：Ahmad Sultan（シリア側調査団長・シリア考古学博物館庁）。

シリア考古学博物館庁長官のBassam Jamous氏および、同庁調査局長のMichel Al-Maqdissi氏には現地調査の便宜を図っていただき、貴重な助言をいただいた。なお、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の調査は、平成22年度の日本私立学校振興・共済事業団補助金と国士舘大学の助成を受けて行った。

#### 参考文献

- Hasegawa, A. (2010) "Sondage at the Site of Tell Ghanem al-Ali." In Ohnuma et al. (eds.), *Formation of Tribal Communities, Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria. Al-Rāfidān Special Issue*: 25-35.
- Ohnuma, K. (2010) "Sondage in Square 6 of the Site of Tell Ghanem Al-Ali." *Al-Rāfidān* 31: 129-131.
- Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) (2010) "Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of ar-Raqqā, Syria, 2009." *Al-Rāfidān* 31:97- 207.
- Hasegawa, A. (2009) "Sondage at the Site of Tell Ghanem al-Ali." In Ohnuma et al. (eds.), *Abstracts of International Symposium Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*, pp. 7-9. Tokyo.
- Ohnuma, K. and A. Al-Khabour (2009) "Integrated Research in the Bishri Region." In Ohnuma et al. (eds.), *Abstracts of International Symposium Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*, pp. 2-3. Tokyo.
- Tsuneki, A., Hasegawa, A. and A. Sultan (2009) "Sondage and Surface Research at Tell Ghanem al-Ali." In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.), *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Eighth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.
- Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) (2009) "Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of ar-Raqqā, Syria, 2008." *Al-Rāfidān* 30: 135-225.
- Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) (2008) "Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of ar-Raqqā, Syria, 2007." *Al-Rāfidān* 29: 117-193.
- 長谷川敦章 (2009) 「紀元前3千年紀におけるユーフラテス河中流域の集落と墓域の関連性ーテル・ガーネム・アリ出土人物形土製品の検討からー」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生ー西アジア考古学最前線』143-157頁 同成社。